## 0.1 R4 数学 A

 $\boxed{1}$   $(1)[0,\frac{\pi}{4}]$  と  $[\frac{\pi}{4},\infty)$  にわけて収束をしらべる.

 $x \in [0, \pi/4]$  で  $\frac{1}{2} \le \cos x \le 1$  である.不等式を 0 から x まで積分すると,  $\frac{1}{2}x \le \sin x \le x$  を得る.

$$\int_0^{\pi/4} \left| \frac{\sin x}{x^{\alpha}} \right| dx \le \int_0^{\pi/4} \frac{1}{x^{\alpha-1}} dx = \begin{cases} \left[ \frac{1}{2-\alpha} \frac{1}{x^{\alpha-2}} \right]_0^{\pi/4} & (\alpha \neq 2) \\ [\log x]_0^{\pi/4} & (\alpha = 2) \end{cases}$$
であるから  $\alpha < 2$  で絶対収束する.

 $\int_0^{\pi/4} \frac{\sin x}{x^{\alpha}} dx \ge \int_0^{\pi/4} \frac{1}{2x^{\alpha-1}} dx$  であるから、 $\alpha \ge 2$  で発散する.

 $1<\alpha<2$  のとき, $\int_{\pi/4}^{\infty}\left|\frac{\sin x}{x^{\alpha}}\right|dx\leq\int_{\pi/4}^{\infty}\frac{1}{x^{\alpha}}dx=\left[\frac{1}{1-\alpha}\frac{1}{x^{\alpha-1}}\right]_{\pi/4}^{\infty}$  であるから  $\alpha>1$  で絶対収束する.

 $\alpha \le 1$  のとき,  $p > q \ge \pi/4$  に対して

$$\left|\int_{q}^{p} \frac{\sin x}{x^{\alpha}} dx\right| = \left|\left[\frac{-\cos x}{x^{\alpha}}\right]_{q}^{p} - \int_{q}^{p} \frac{\cos x}{\alpha x^{\alpha+1}} dx\right| \leq \frac{1}{q^{\alpha}} + \frac{1}{p^{\alpha}} + \frac{1}{\alpha} \int_{q}^{p} \frac{1}{x^{\alpha+1}} dx \leq \frac{1}{q^{\alpha}} + \frac{1}{p^{\alpha}} + \left[-\frac{1}{x^{\alpha}}\right]_{q}^{p} \to 0 \quad (p, q \to \infty)$$
 であるから、 $\alpha < 1$  で収束する.

以上より  $\int_0^\infty \frac{\sin x}{r^\alpha} dx$  は  $\alpha < 2$  で収束する.

(2)(1) の計算から  $1 < \beta < 2$  で収束し、 $\beta \ge 2$  で発散することがわかる.

 $\beta \le 1$  のとき,  $n \in \mathbb{N}$  に対して

$$\int_{n\pi}^{(n+1)\pi} \frac{|\sin x|}{x^{\beta}} dx = \int_{0}^{\pi} \frac{\sin x}{(x+n\pi)^{\beta}} dx \ge \frac{1}{((n+1)\pi)^{\beta}} \int_{0}^{\pi} \sin x dx = \frac{2}{((n+1)\pi)^{\beta}}$$
$$\int_{1}^{\infty} \frac{|\sin x|}{x} dx = \sum_{n=1}^{\infty} \int_{n\pi}^{(n+1)\pi} \frac{|\sin x|}{x} dx \ge \sum_{n=1}^{\infty} \frac{2}{((n+1)\pi)^{\beta}}$$

よって $\beta$ <1で発散する.

以上より $1 < \beta < 2$ で収束し、 $\beta \le 1, 2 \le \beta$ で発散する.

- $\boxed{2} (1)b(x,y) = x^T A y = x^T (-A^T) y = -((Ax)^T y)^T = -y^T (Ax) = -b(y,x).$
- (2)(1) より  $y \in \ker f$  のときに示せば十分.  $b(x,y) = x^T A y = x^T 0 = 0$ .
- $(3)Ax = v + u, v \in V, u \in \ker f$  と一意に表せる.  $B(x,v) = b(x,Ax-u) = x^TA(Ax-u) = x^TA^2x = -x^TA^TAx = -(Ax)^TAx$  である.  $x \in V$  より  $Ax \neq 0$  であるあから, $(Ax)^TAx \neq 0$ . よって  $B(x,v) \neq 0$ .
  - $(4)\det A = \det -A^T = (-1)^n \det A$  より n が奇数なら  $\det A = 0$ .
- (5)V の基底  $\{v_1,\ldots,v_k\}$  を一つ固定する。 $b_{ij}=B(v_i,v_j)$  として行列  $M=(b_{ij})$  を定める。 $x=\sum x_iv_i,y=\sum y_iv_i\in V$  に対して  $B(x,y)=(\sum_i x_iv_i)^TA(\sum_j y_jv_j)=\sum_{i,j} x_iy_jv_i^TAv_j=\sum_{i,j} x_iy_jb_{ij}=x^TMy$  である。(この転置は  $\mathbb{R}^n$  の標準基底による座標の転置ではなく,固定した V の基底による座標の転置)(1)から  $b_{ij}=b(v_i,v_j)=-b(v_j,v_i)=-b_{ji}$  であるから M は交代行列。M が正則でないとする。このときある  $x\in V$  について Mx=0 であるが任意の y について  $B(x,y)=-B(y,x)=-y^TBx=0$  となり(3)に矛盾。よって M は正則。  $\det M\neq 0$  だから(4)より k は偶数。  $\operatorname{rank} A=n-\dim\ker f=\dim V=k$  より  $\operatorname{rank} A$  は偶数。
- ③ (1) 任意の  $x \in X$  について  $(x,y) \in U$  より  $x \in S_x, y \in V_x, S_x \times V_x \subset U$  なる開集合  $S_x, V_x$  が存在する.  $\{S_x \mid x \in X\}$  は X の開被覆であるから有限部分被覆  $\{S_{x_i} \mid i=1,\ldots,n\}$  が存在する.  $V = \bigcap_{i=1}^n V_{x_i}$  とすると任意の  $x \in X, y \in V$  について  $x \in S_{x_i}$  なる  $x_i$  が存在して  $y \in V_{x_i}$  であるから  $(x,y) \in U$ . よって  $X \times V \subset U$  である.
- $(2)X \times Y$  の閉集合 C を任意にとる。 $U := X \times Y \setminus C$  とする。 $y \notin P_Y(C)$  について  $X \times y \subset U$  であるから (1) より  $X \times V_y \subset U$  なる開集合  $V_y$  が存在する。 $V := \bigcup_{y \in P_Y(C)} V_y$  とすると, $Y \setminus P_Y(C) \subset V$  である。 $v \in V$  に対して  $X \times \{v\} \subset U$  であるから  $\forall x \in X, (x,v) \notin C$  である。よって  $v \notin P_Y(C)$  であるから  $Y \setminus P_Y(C) = V$  より  $P_Y$  は閉写像.

4 (1)f の極は z=i,-i である. z=i の留数は  $\lim(z-i)f(z)=\frac{e^{xi}}{2i}$  である. z=-i の留数は  $\lim(z+i)f(z)=\frac{e^{-xi}}{-2i}$  である.

(2)i, -i は共に D の内部の点である. 留数定理から  $\int_C f(z)dz = 2\pi i (\frac{e^{xi}}{2i} + \frac{e^{-xi}}{-2i}) = \pi (e^{xi} - e^{-xi}) = 2\pi i \sin x$ である.

 $(3)C_1$  を 1+Ri から Ri への有向線分, $C_2$  を半径 R の円の実部が負の部分を反時計回りに周る曲線, $C_3$  を -Ri から 1-Ri への有向線分とする. $C_1,C_2,C_3,L_R$  を合わせると C となる.R>2 のとき

$$\left| \int_{C_1} f(z) dz \right| = \left| \int_{1}^{0} \frac{e^{x(t+Ri)}}{(t+Ri)^2 + 1} dt \right| \le \int_{0}^{1} \left| \frac{e^{xt}}{t^2 - R^2 + 1 + tRi} \right| dt \le \int_{0}^{1} \frac{e^{x}}{R^2} dt \to 0 \quad (R \to \infty)$$

$$\left| \int_{C_3} f(z) dz \right| = \left| \int_{0}^{1} \frac{e^{x(t-Ri)}}{(t-Ri)^2 + 1} dt \right| \le \int_{0}^{1} \left| \frac{e^{xt}}{t^2 - R^2 + 1 - tRi} \right| dt \le \int_{0}^{1} \frac{e^{x}}{R^2} dt \to 0 \quad (R \to \infty)$$

$$\left| \int_{C_2} f(z) dz \right| = \left| \int_{\frac{\pi}{2}}^{\frac{3\pi}{2}} \frac{e^{xRe^{i\theta}}}{R^2 e^{2i\theta} + 1} Rie^{i\theta} d\theta \right| \le \int_{\frac{\pi}{2}}^{\frac{3\pi}{2}} \left| \frac{e^{xR\cos\theta}}{R^2 e^{2i\theta} + 1} R \right| d\theta \le \int_{\frac{\pi}{2}}^{\frac{3\pi}{2}} \frac{R}{R^2 - 1} d\theta \to 0 \quad (R \to \infty)$$

よって  $\lim_{R \to \infty} \frac{1}{2\pi i} \int_{L_R} f(z) dz = \lim_{R \to \infty} \frac{1}{2\pi i} \int_C f(z) dz = \sin x$  である.